

ボランティアのあり方

—子ども食堂の発展に向けて—

1200420 梶野仁美

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

人と人との直接的な交流が減少している中で、子供をターゲットにしたボランティアが存在する。「子ども食堂」だ。貧困家庭を主に意識し、地域の子どもたちに食事を提供する。

本研究では、子ども食堂を運営していく上での問題点を明らかにすることで、子ども食堂への参加人数の増加促進案を提案した。そのためには、子ども食堂の認知度の向上が欠かせない。

2. 序論

子ども食堂は、a) 貧困問題 b) 地域の活性化や人々の居場所づくり c) 食育の3つの大まかな機能がある。ゆえに、地域の人々の触れ合いの拠点としての役割も期待されている。

c)の食育については、孤食問題の改善も含まれる。子どもの孤食が増えている原因の一つとして、孤食が当たり前だと考えられているからである。近年ではインターネットの普及やスマートフォンの利便性、近くにはコンビニなどもあり、家にはテレビやゲームもあるため、子どもが1人でも大丈夫な空間であると考えている親が多い。そのため、親が「孤食の何がいけないの」と思っているため、子どもも孤食が「当たり前」だと感じてしまい、自然と孤食になってしまう。—注1) 農林水産省では食育の推進における子ども食堂の意義を以下に挙げている。—親子で参加する場合も含め、(a) 子供にとっての貴重な共食の機会の確保 (b) 地域コミュニティの中での子供の居場所を提供等の積極的な意義が認められます。—注2)

私は高知市8ヶ所の子ども食堂でボランティア活動を行っていた。活動していく中で、利用者・主催者やスタッフ・ボランティアなど、数多くの人々の考えや困っていることに触れた。

全国200か所の子ども食堂が参加している「子ども食堂安

心・安全プロジェクト」。そこに来ている子どもの数は、年間で延べ114,580人。全国の子ども食堂はこの11倍以上だから、延べにして約100万人以上の子どもたちが子ども食堂を利用していることになる。—注3) 日本財団によると、日本の子どもの7人に1人(13.9%)が相対的貧困である。—注4) そこから、子ども(14歳以下)の相対的貧困人数を割り出すと、 $15945000(\text{人}) \times 13.9(\%) = 2216355(\text{人})$ 。(2015年)—注5) ゆえに、相対的貧困に当たる子どもの約半数しか子ども食堂を利用していないことになる。

ここで、相対的貧困とは、その国の文化水準、生活水準と比較して困窮した状態を指す。具体的には、世帯の所得が、その国の等価可処分所得の中央値の半分に満たない状態のことである。具体例として、親が病気のために家事をしなければいけない子どもや、食費を切り詰めるために、母親が十分に食事をとっていないという子どもが挙げられる。—注6)

3. 研究の目的

利用者・主催者やスタッフ・ボランティアのみならず、各々の子ども食堂自体がそれぞれの考え方や悩みを抱えている。本当に困っていることは何なのか、各主体にとってより良い子ども食堂のあり方は何なのか。利用者・主催者やスタッフ・ボランティアのどれかだけが損や得をするのではなく、なるべくこの3つ全主体が今以上に利益を得られるような、子ども食堂のあり方を追求し、私なりの考察を出す。

4. 研究方法

文献調査やインタビューを行う。

3.1. 文献調査

子ども食堂の本来のコンセプトや目的・各団体の活動などを調査する。

3.2. インタビュー調査

利用者4名、主催者3名、スタッフ・ボランティア5名の、各主体の人々から、「子ども食堂」について以下の三つの項目を質問した。

項目1：問題点(利用者にとっては不便&不満な点、主催者やボランティアにとっては、子ども食堂運営にあたって上手くいっていない点など)

項目2：良い点(子ども食堂を運営することで運営前より良くなったと思う点)

項目3：改善案(問題点を加味して、子ども食堂をより良くするための案)

5. 結果

① 本当に来てほしい家庭の子が来ていない

私がボランティアをした子ども食堂に携わる方々からご意見を頂いた。

—「こども食堂は貧困のこどものための場所」というイメージが根強くあることを、活動を通して実感しました。この考え方のために、本当に食事を必要としている方が来づらいという問題が起こっており、重大な問題であると感じています。原因の一つとして、各こども食堂の方針や企画が十分にPRできていないことがあり、企画性の強さを各方面にアピールしていくことが今後の課題として挙げられるのではと感じました。」— (大学生ボランティアFさん)

—「自分よりもっと大変な家庭のための場所」と誤解して来ない親子や、「施されるのなんて、まっぴらごめん」と反発して来ない親子や、人と関わること自体に抵抗感があって来ない人たちは、当然いるだろう。—注7)

ここでいう、「本当に来てほしい家庭」というのは、「所得が低く、十分な食事が出来ない家庭」などのことである。

私が参加している子ども食堂の複数で、「本当に来てほしい子は来られていない」という意見が多数うかがえた。

② 開催維持(人、資金、繋がり)

高知県立大学でサークルとして子ども食堂の運営をしているKさんによると、一問題点としてはサークルの話に寄ってしまうのですが、資源が乏しいことや開催に多くの人々の力が必要になることです。資金や無償でいただけるものがどこにあるのか、どれくらいあるのか、協力してくれる人はどれくらいいるのか。その情報を得るためのつながりも必要であり、そのつながりをつくることにも時間がかかります。その

ため学生の団体にとっては継続することが単純であるようで、いちばん難しいと感じています。—(大学生主催者Kさん)

③ 子ども食堂の機能の認知の低さ

子ども食堂の3つの機能、a) 貧困問題 b) 地域の活性化や人々の居場所づくり c) 食育の中における、b) 地域の活性化や人々の居場所づくり、と、c) 食育機能の認知度が低い。

インタビューにおいてもbやcの機能の認知の低さが伺える回答が頂けた。

—子ども食堂の始まりは、貧困からと聞いていたのですが、さまざまな形で急に広がってきたので、子ども食堂のネーミングが適切かどうかとも感じますね。子ども食堂は小さな集団の中で、今の生活、いまの気持ちなど真の姿を聞けるし見られるチャンス。若い保護者の考え、思い、しんどさ、生きづらさなど吸い上げられるかもしれないので、ボランティア役の中に行政や専門職も入って、今何が必要でどういう施策が有効か地域の中に入って拾い出して、新しいコミュニティを形成出来たらと。子どもだけでなく、仕事を退職してからの孤独者も、身寄りのない独居高齢者も凄手数。なんとか子ども食堂で繋げないかなと改めて思います。— (ボランティアKさん)

—私も最初は子どもに向けた活動だと思っていたけど、実際に参加して子ども食堂が親の息抜きの場になっているのは大きな発見でした。親は来て話をすることで育児の精神的負担を軽減させていることがわかり、もしかしたら子どもより親の方が、恩恵があるのかもと思いました。—(当時学生ボランティアIさん)

6. 考察

本研究で、本当に食事を必要としている方が来づらいこと、「地域の活性化や人々の居場所づくり」「食育」機能の認知が低いという問題点が浮かび上がったが、それを解決するにはまず、子ども食堂の知名度向上が対策として有効であろう。

そもそも子ども食堂と聞いてもピンとこない人々も多い。また、「子ども食堂＝貧困」というキーワードに世間が囚われすぎているため、そのイメージの払拭に力を入れたい。

① イベントの開催

各子ども食堂が属する地域のお祭りやイベントに参加すること、あるいは子ども食堂主催でイベントを開催する。

写真 1)は、毎月開催されるお誕生日会の様子だ。その月誕生日の子供はもちろん親御さんやその場に集まった皆を歌とケーキで祝福する。



写真 1)

イベントは子供たちの興味を惹きやすく、参加者増加に繋がりやすい。地域のお祭りやイベントに参加することは、直接子ども食堂を訪れるよりもワンクッションあることで、抵抗が軽減されるであろう。また、子ども食堂自らが旗揚げするよりも知名度があり、集客力が見込める。

② レシピサイトへの投稿

主に料理を提供する場である子ども食堂。カレーなどごく一般的なメニューもあれば、ボランティアが施行を凝らしたメニューも数多くある。また、その地域に根ざした食材が使われることも多い。私がボランティアをしていた高知市では、鹿肉、小夏、新鮮な魚介も多く使用されていた。

レシピサイトに子ども食堂で提供したメニューを投稿することの利点としては、まず、不特定多数の人に見てもらえることである。子ども食堂の料理を実際に食べて気になった方のみならず、子ども食堂の存在を知らない方も検索に引っかかった際に認知することができる。

また、子供向けのメニューが多いため、小さい子供がいる家庭の親にターゲットを絞ることも出来る。

③ 料理教室の開催

①と②を併せた考え方である。近年、スーパーやショッピングモールの一角でも料理教室が開催されているのが見受けられる。子ども食堂で提供されるレシピを実際に親御さんに作ってもらおう。また、複数一組のチームで取り組むようにする。そうすれば、親御さん同士の交流も深まり、仲良くな

れる可能性もある。結果、一緒に子供を連れて子ども食堂に来たり、ボランティアとして参加したりすることも可能だ。

④ コンセプトの明確化と多様性

各子ども食堂では主催者が掲げているコンセプトが異なる。

- ・水曜校時カフェ→地域での居場所づくりをコンセプトにしているこちらは、さまざまな年齢層の人たちが集い、バイキング形式の食事を楽しみながら、自由に交流を図る

- ・あいあいまんま食堂→和気あいあいと皆でご飯を食べようがコンセプトだ。個食を無くそう1人ご飯より集いの場へ出かけてみよう。そして、公共施設出の開催は傷害をお持ちの方ともご一緒できる事が大切で、ユニバーサルなコミュニティ子ども食堂がコンセプトである。こちらの子ども食堂は、高知市高須葛島東部健康福祉センターという、公共施設での開催を行っている。

- ・えいや家(か)→「NPO 法人 GIFT」が子どもを中心とした地域の居場所として開設。ボランティアの高校生や大学生から勉強を教えてもらったり、食事の準備をしたりと自由に過ごした後、みんなで一緒に食事をする。事務局長の眞鍋大輔さんによると、子どもたちにとって自分の居場所として実感できる場所であると同時に、社会のルールを学んでいく場でもあってほしいと言う。(注 8)

コンセプトをはっきり認知出来ていないために、「子ども食堂=貧困」に囚われ、行くのをためらう親子もいる。しかし、「食育」「地域の憩い場」など、気軽なコンセプトであれば、ハードルが下がり、足を運びやすくなるだろう。

しかし、コンセプトを固めすぎること問題である。特に、子供たちのみで足を運ぶとなると、近場にある子ども食堂にしか行けない。ゆえに、コンセプトにそぐわない子供でも気軽に足を運べるような環境作りも欠かせない。

多様性の一案として、年齢制限のない子ども食堂の開設が挙げられる。

⑤ 「親」へのアピール

5. 結果③の当時学生ボランティア I さんの意見にあるように、子ども食堂は親にとっても「居場所」なのである。写真 2 のように、多くの親たちが参加する子ども食堂も存在し、その大半がリピーターである。インタビューを行った N さんによると、

一私にとって子ども食堂とは、行ってみたら実家のような雰囲気を出迎えてくれる、想像していたより明るい場所です。今ではなくてはならない存在です。たまたまブログで知ったのがきっかけでしたが、行き詰まっていたときに行ってみると、暖かく迎えてくれ、たくさんのひとが必要な場所なのだ毎回実感しています。育児に行き詰まっているすべてのひとが、荷をおろせる瞬間だと思います。たくさんのひとが笑顔なのはもちろんスタッフさんの笑顔にいつも救われています。子供食堂は貧困家庭が主となっていますが、私の場合はすこし違っていて、たくさんの子供との食事の時間が楽しい場であるはずか、気付いたら険悪な雰囲気で私にとって苦痛な場になっていた、そんなときに明るい雰囲気の食堂に癒されたことはいまでも忘れません。来ている方は多分みな色々、悩みをかかえているでしょう。私自身お悩み相談もさせてもらい、大半が子供食堂で解決されました。ほんとに万能で沢山の救いがそこにあるのだとおもいます。多分そう感じている方は数多くいるでしょう。すごく地域に必要な場所であり、これからも増えていけばいいと思います。(主婦 N さん)



写真 2)

私がボランティアをしていた中でも、普段から多くの親御さんが「息抜きできる場所」「色んな人との出会いがある場所」として子ども食堂に感謝の意を述べていた。また、その親御さん達が食器洗いや掃除などの手伝いをしてくれることも多々あり、子ども食堂の存在がどんなに親にとってありがたいかを思い知らされる。

しかし、「子ども食堂」というネーミングも相まって、まだまだ親の利用率は低い。学校や幼稚園へのチラシ配布の強化は勿論のこと、親が働く会社などにもチラシや広告の設置を促すべきである。たとえ親が仕事などで子ども食堂へ足を運ぶことが困難でも、子どもへの食事作りや留守中の子どもの居場所の心配など、育児の負担も減る。この家事や育児の

負担軽減をより広く親へアピールしていくことで、参加者の増加に繋がる。

7. 今後の課題

- ・「子ども食堂＝貧困」のイメージの払拭と同時に「地域の活性化や人々の居場所づくり」「食育」のイメージの定着
- ・活動資金、人員の確保
- ・子ども食堂同士や外部とのネットワーク作り
- ・行政機関の介入、支援
- ・宣伝方法の再考
- ・「子ども食堂」というネーミングの改変

【参考・引用文献】

注 1)

地域に根ざす「こども食堂」の在り方について

～愛媛県伊予市上野「カーコン南いよこども食堂」を対象として～ 1190440 影浦 ちひろ 高知工科大学 経済・マネジメント学群

注 2)

<https://www.maff.go.jp/syokuiku/kodomosyokudo.html>

「農林水産省 子供食堂と連携した地域における食育の推進」

注 3)

[https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20180403-](https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20180403-00082530/)

[00082530/](https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20180403-00082530/) 「こども食堂 2,200 か所超える 2年で7倍以上 利用する子どもは年間延べ100万人超」湯浅誠

注 4)

<https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2019/28194>

「日本の子どもの7人に1人が貧困という事実。いま「第三の居場所」がなぜ必要なのか？」

注 5)

<https://www.e-stat.go.jp/stat->

[search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200524&stat=000000090001&cycle=0&tclass1=000000090004&tclass2=000001051180&stat_infid=000013168603](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200524&stat=000000090001&cycle=0&tclass1=000000090004&tclass2=000001051180&stat_infid=000013168603)

「人口推計 / 長期時系列データ 長期時系列データ (平成12年～27年)」

注 6)

<https://cfc.or.jp/archives/column/2019/03/01/23762/> 「相対的貧困とは何か？」

注 7)

<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20180505-00084818/>「こども食堂に「来てほしい子」は来ているのか？」湯浅誠

注 8)

https://www.yonden.co.jp/cnt_land/1811/jumping_furusato.html『一緒に食べる・一緒に笑う』高知県内に広がる『子ども食堂』 高知家（こうちけ）子ども食堂